



神坂雪佳研究

矢野, 節子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2018-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7319号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007319>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目

神坂雪佳研究

氏 名： 矢野節子

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻 美術史学

指導教員氏名 (主) 宮下規久朗 教授
(副) 増記隆介 准教授
(副) 梶尾文武 准教授

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

神坂雪佳(1866—1944)は京都粟田に生まれ、16歳より四条派の絵画を学んだ。川島織物で織物図案の研究を行ったのち、第四回内国勸業博覧会の作品制作指導のため、京都市に招聘された図案家の岸光景(1839—1922)に師事した。光景から琳派について学び、低迷していた京都の工芸界において、指導者的役割を担った。伝統工芸の産地でもある京都は、維新後幕府と公家という顧客を失い、高い技術を活用することができなくなった。替わって制作をした輸出品によって技術力の低下を招くこととなった。

図案家となった雪佳は、京都美術協会の機関誌の編集長を務め、殖産を目的として開催された、同会の新古美術品展に、出品と受賞を重ねたあと審査員となるなど活躍した。グラスゴー万国博覧会など欧州を視察し、琳派の意匠の優れていることを再確認すると、図案研究団体での活動を活発に行った。明治40年(1907)に図案研究団体の佳美会を主宰し、農商務省主宰図案及応用作品展の審査員を務め、大阪高島屋百選会に設立時より審査員となるなど、時代の変化に対応して活躍した。日本画家としての代表作には、大正7年(1918)に青蓮院内叢華殿襖80枚に揮毫した草花図が挙げられる。工芸図案では、大正2年(1913)に御大礼献上の蒔絵棚、文台、硯箱を制作し、6年後の東宮立太子に際してお祝いの文台重硯箱を制作した。

このように、生涯を通じてつづけてきた幅広く安定した活動には、琳派への強い想いがあったからであろう。雪佳の作風を決定づけたのは、光景のもとで図案を学んだことが大きい。光景は琳派の意匠をよくし、作品の収集も行っていた。光景の図案には筆手の手法を用いたものが多く見られる。これは光悦の様式に倣っていると考えられる。博覧会等に出品のため、光景の制作助手を務めていた雪佳は、28歳のころ、芦手絵会を結成した。筆手絵の主題を古今集に取材して制作したことが、雪佳の作風を決定づけた要因のひとつであると考えられる。この研修の場には、富岡鉄斎(1837—1924)が招かれている。指導や評論家という立場であったと思われるが、文人画家、儒学者として知られる鉄斎との交流は雪佳に影響を与えたと推測される。四条派、琳派、南画にとらわれることなく学んだことは表現方法の幅を広げたことであろう。和歌の歌意を絵画化したものを歌絵というが、もともと日本美術は文学を表現するものであった。晩年に制作された『うた絵』は、筆手の表現を歌絵に加えている。雪佳が歌絵と筆手を分ち難くとらえていたと考える。

本研究では、神坂雪佳の業績を概観した上で、その作風の特徴を考察した。第1章では、雪佳の図案家としての方向を決定づけたのは光景について述べた。これまで光景について語られることは少なかった。光景は温知図録の制作、壬申検査への同行、輸出工芸の精工社の主宰、龍池会への参加、農商務省での図案改良などの活動を行った。多様な作風で知られるが、光悦、光琳など琳派への造詣が深かった。光景の画風の背景をさぐるために、光景の師である文村について調べたところ、文晁と江戸琳派の関わ

りなどが影響している可能性を得た。光景と雪佳の師弟関係については、京都奨美会における博覧会出品の工芸图案の制作を詳細に見た。光景の图案には琳派の作品からの応用があり、雪佳は助手を務めることでその手法を学んだ。物語や和歌を意匠として表現することが、日本美術の特徴である。琳派では装飾的な文様を取り上げられることが多いが、文学に基づくことが基本的な性質である。その表現方法として葦手の手法があり、雪佳は20代ごろに光景から学んだと考える。雪佳は琳派の手法で图案制作を行い、工芸研究会を主宰し、京都の工芸界の活性化に貢献した。

また、明治から大正時代にはどのような工芸品が流通していたのかを、売立目録の調査を行って検証した。その結果、图案集の模倣などによる安易な图案が存在し、農商務省が图案改良を政策として必要としていた理由を確認した。

第2章では、先行研究でふれられることの少なかった能絵について論考を行った。能楽を主題とした作品は琳派の作家に多くある。工芸の意匠として表現された名品が伝わっているほか、光悦の謡本の表紙は图案化されている。近代になり能楽が普及すると、演能の様子を描いた能画、能絵を専門に描く能画家が登場する。能画家は舞台上の様子を描くことが主で、伝統的な日本画家の描く能楽とは異なる。そのような能画家の月岡耕漁(1869—1927)との合作が、十二ヶ月の能楽を描いた画帖である。この画帖は、京都国立近代美術館とミネアポリス美術館にそれぞれ1帖が所蔵される。ミネアポリス本《能楽十二ヶ月》では題箋と内容の相違について指摘した。その上で考察したところ、雪佳は能楽を物語と考え、十二ヶ月の月次絵として制作を行ったと結論に至った。能楽には和歌が引き歌として取入れられていることもあり、雪佳にとって能絵も歌絵のひとつであったと考える。また、大正から昭和の初めにかけては能楽が盛んで、图案としても需要があった。そのような状況下で、従来とは異なる能絵のあり方を創り出したことも判明した。舞台の演能を描く能画家の耕漁に対して、雪佳は能を装飾的な意匠と表現しているなど、画風の相違点を見出した。

昭和御大典を記念して、雪佳が制作した能画の画帖でも、人物の背景は舞台での様子ではなく想像されるものとなっている。したがって、雪佳の能絵とは、謡曲に主題を求めていると考える。

第3章では、雪佳の最後の版画集『うた絵』について考察を行った。この作品には、中世の工芸にはない新しい葦手の表現がなされている。従来の葦手は和歌の文字を水辺の景物に擬すのであるが、雪佳は和歌の句を樹木や山、月などに擬している。和歌と図様を一枚の画面に収め、連なった文字を景物として配し、構成を行っている。制作にあたって、雪佳が着想を得たと思われる作品と比較して考察を行った。謡本表紙、江戸琳派の絵画表現、土佐派、南画、『春正百図』の图案の影響が見られることを確認した。また、その技法には遠近法が使用されるなど、近代的な要素も含まれている。土佐派粉本については、御所内裏障壁画の图案が複数ある。さらに、本作は古今集のうち、寛平の御後の歌を中心にし

ていることから、宗達、光悦、光琳が表現した王朝文化を、雪佳は歌絵で描いたと考える。

以上、本研究では雪佳の作品のうち、これまで言及されてこなかった能絵と歌絵に焦点をあてて考察を行った。雪佳は師である光景の影響で、琳派の图案家・作家となった。当時の社会情勢も考慮して、活動を概観するとともに作風について検証した。

論文審査の結果の要旨

氏 名	矢 野 節 子
論 文 題 目	神坂雪佳研究
要 旨	
<p>神坂雪佳（1866—1944）は、京都に生まれ、十六歳より鈴木瑞彦（1848—1901）に就き、四条派の絵画を学んだ。川島織物で織物図案の研究を行ったのち、第四回内国勸業博覧会（以下、内国博）の作品制作指導のため、京都市に招聘されていた図案家・岸光景（1839—1922）に師事し、我が国の古典、琳派について学び、低迷していた京都の工芸界において、指導者的役割を担った。永く工芸技術を継承してきた京都は、明治維新後、幕府と公家という高い技術を活用する公の制作の機会を失い、輸出工芸品制作は、技術力の低下を招くこととなった。明治19年（1886）、京都祇園中村楼で、フェノロサ（1853—1908）は、東京における美術振興に対して京都の低迷を指摘する講演が行ない、このような状況下において、画家・久保田米庵（1852—1906）、千總当主・西村総左衛門（？—1935）らにより、明治23年（1890）に京都美術協会が設立された。これは、先に発足した東京の日本美術協会に倣う組織であったが、より自治性が強く、独立した美術家組織であった。</p> <p>図案家となった雪佳は、明治31年（1898）より美術協会の機関誌『京都美術協会雑誌』の編集に携わり、のちに編集長となる。殖産を目的として開催された同会の新古美術品展において出品と受賞を重ね、審査員を務めた。明治34年（1901）グラスゴー万国博覧会ほか欧州各地を視察し、琳派の意匠の優れていることを再確認すると、琳派意匠を中心に図案研究団体での活動を活発に行った。京漆園で同時期に活躍した浅井忠（1856—1907）は、アールヌーヴォーと琳派を融合した作品を制作しているが、雪佳は生涯、伝統的な琳派の作家であることを自負した。明治40年（1907）には、図案研究団体の佳都美会を主宰し、農商務省主催図案及応用作品展（以下、農展）の審査員を務め、また大阪高島屋百選会の設立時より審査員となり、商業活動と結びつくことで時代の要請に対応して活躍した。大正2年（1913）に御大礼献上の蒔絵棚、文台硯箱の図案を制作し、六年後の東宮立太子に際して祝賀の文台重硯箱を制作した。一方、画家としては、大正7年（1918）の青蓮院叡華殿の襖「草花図」（80面）が代表作としてあげられる。このように、生涯を通じての幅広く安定した活動を支えたものは、琳派および琳派を通じての日本の古典美への強い憧憬であった。本研究は、雪佳の目指した琳派とはどのようなものであったのか、これまで語られてこなかった彼の歌絵と能絵について考察することで明らかにすることを目的とする。</p> <p>まず、第1章では、師である岸光景からの影響について考察される。明治4年（1871）以来、毎年開催された京都博覧会の準備機関であった京都奨美会では、光景がその図案を決定したが、雪佳は、その助手を務めながら日本の伝統的な意匠に関する指導を受けたと筆者は指摘する。具体的には、平安時代後期に盛行した芦手絵について、雪佳による学習の様相を『京都美術協会雑誌』の記事から明らかにするとともに、琳派作品の収集家であった光景からは、作品を譲り受けるなど、具体的な作品を通じて琳派意匠について研究を行った実態を明らかにした。また後年の作品からは、この時期に光景から学んだことが雪佳の図案家としての活動を決定づけた状況が浮かび上がる。</p> <p>第二章では、能絵について考察される。特に能画家として著名な坂巻（月岡）耕漁（1869—1927）との合作「能絵十二月月」（ミネアポリス美術館・京都国立近代美術館）を取り上げた。その作品の構成は、謡曲を通じた王朝文学の受容に重点を置いており、雪佳は能絵を実際の演能の絵画化という従来の手法とは異なる捉え方で描いたことが明らかとなった。そして、この作品は伝統的な装幀の画帖であることから、室町時代以来の床の間の棚飾りも含めた鑑賞を目的として制作されたものと推察する。さらに本画帖の美術史的意義は、月次絵と能絵とを融合させ</p>	
主 査 記 載 氏 名 ・ 印	宮下 規久朗

た点にあるとする。特に謡曲の季節に厳密に対応することよりも、謡曲に謡われた王朝文学のイメージが示す意匠を優先させている点に、それまでにはない能絵のあり方が看取され、新しく創り出された、このような十二月の連作様式は松野奏風などの昭和の能画家に継承され、月次絵としての能絵は、広く鑑賞者に受け入れられたことを明らかにした。

第三章では、昭和9年（1934）に『古今集』から選ばれた二十五首の和歌に取材した雪佳の『うた絵』について考察を行った。本作は、六十九歳の制作で、彼の刊行された最後の著作であるが、研究史上、これまで論じられることが少なかった。本研究では、雪佳が参考にしたと思われる先行作品について、①光琳カルタ、②謄本表紙、③琳派の絵画、④物語絵、⑤土佐派、⑥蒔絵を中心に比較検討し、その受容の具体的なありようを明らかにした。その結果、雪佳は琳派だけでなく、土佐派等の影響もを受けていることが明確となった。

従来、雪佳は、琳派に連なる作家としてのみ認識されている。琳派は言うまでもなく、宗達、光琳、抱一と時代と場所とを異にしてあらわれた画家たちの先人への私淑による継承を特質とする。そのため、時代ごとにその様式を変化させてきたことも重要である。雪佳の活躍した明治の後半から昭和の初めまでの時期、京都では、工芸を産業として発展させるために汎用性のある図案という新しい要素が必要とされ、雪佳は琳派の手法でその要求に応えた。画家としての雪佳も花鳥画、歴史画、能絵において形態や技法等、琳派の様式を備えた制作を行った。では、雪佳独自の琳派様式とはどのようなものであったのだろうか、本論文は、その問いに対する雪佳の答えが『うた絵』であると位置付ける。その特質を端的に述べれば、王朝文化への憧れを琳派に融合させたことと言える。雪佳の生きた時代の京都では、「平安」という言葉が随所に見られた。それは、平安神宮の造営に結実するものであるが、漆芸家の迎田秋悦、江馬長閑、漆器商の象彦などは、書籍きに「平安」という言葉を添えて署名している。これはいうまでもなく、平安京の平安であり、王朝イメージと結びついた京都を指している。この平安蒔絵師という呼び方は京都の蒔絵師たちによる自称と考えられ、千年の都としての歴史を担ってきたという漆芸家たちの自負が見え隠れするようである。平安時代に成立した『古今集』によって王朝和歌の美的感覚が確立したといわれる。雪佳は古今集に規範を求めて『うた絵』を制作し、自らの画業の集大成としたものと結論付けた。

本研究は雪佳の生涯を辿りながら、特に彼の能絵と歌絵制作について深く考察し、これを通じて、雪佳が『古今集』に取材した作品を多数制作していることをはじめて明らかにした。特に、謡曲はつづれ織りの錦に喩えられるようにその章句に多くの和歌を引用している。このことから、雪佳にとって能絵も歌絵のひとつの在り方であったことが推察される。雪佳が活躍した明治後半から昭和初期にかけては、能楽が盛んであり、図案としても多くの需要があった。そのような状況下において、謡曲に引かれた平安時代の詩歌に注目し、そこに琳派の意匠をも取り込みながら、従来とは異なる能絵のあり方を創り出したことが本研究によって初めて明らかにされた。また、歌絵は、詩歌のイメージをより直接的に絵画化し得る主題であり、平安時代に遡る筆手の意匠なども復興しながら、近代における新たな歌絵を創出したという雪佳の近代日本美術史上の位置付けを明確に提示した。

本研究は、これまで近代日本美術史研究の中では等閑に付されている観のあった、近代の京都の工芸における琳派復興、古典復興の様相を神坂雪佳という作家を通じて明らかにしたものであり、日本各地に点在する多くの資料を渉猟した労作として、博士（学術）を与えるに相応しいものと審査委員全員の意見の一致をみた。

審査委員

区 分	職 名	氏 名	区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	宮下 規久朗	副 査	准教授	梶尾 文武
副 査	教授	松田 浩則	副 査	大阪芸術 大学教授	五十嵐 公一
副 査	准教授	増記 隆介			